

が、商売などの経験がない上に、人の良すぎる父は、病気で寝ている人がいるとただで品物をあげたり安く売ったりで、もうけなどほとんどなかったようだ。私は教職採用願いの手続きを県に提出し、運よく採用され、水戸市立五軒小学校へ五月から勤務できるようになった。弟は水戸一高の三年生に編入させてもらい、私と弟は、水戸市で金物店を営んでいた父の弟の家に置いてもらうようになった。叔父宅は朝早くから夜遅くまで商売が忙しいので、私たちも手伝いをした。その叔父は、戦後の建築ブームで釘や大工道具が売れて大もうけをしたらしく、私たち一家が住めるようにと家を建てて貸してくれた。

昭和二十四年春にその借家が完成し、田舎にいた両親と妹たちも水戸へ来て、親子六人で暮らせるようになった。父は五十歳を過ぎていたので就職先がなかなかなくて、市役所の臨時職員になった。すぐ下の妹も市役所に採用され、何とか生活できるようになった。末の妹は五軒小学校の五年生に転入したが、終戦後の混乱から勉強などは全然していなかったので学業の遅

れでみんなについていくのが大変で随分苦勞したとのことであった。

思えば日本が敗戦国となり、一日にして立場を大逆転させ、混乱の中を生き抜いて、やっと日本へ家族全員がそろって帰ることができたのは、不幸中の幸いであった。

異国の地で、今も眠っておられる多くの同胞の靈に對しても、戦争は二度と繰り返してはならぬことを誓うとともに、若い世代の人々にも伝えたいと思っている。

ハラシヨの少女

東京都 新橋 和子

一 東京から上海へ

父は根っから新聞作りが好きな人で、色々な新聞、出版などに携わっていた。上海に渡る前の十年間は、東京の城北地区でローカル紙を発行していた。

当時、上海に国策新聞として「財団法人大陸新報社」が創立されることになり、父の兄（当時上海大使館勤務）のあっせんで入社することになった。この大陸新報社は上海に本社を置き、南京、漢口、徐州の各支社で新聞を同時発行するほか、中国語の日刊紙「新申報」および「大陸年鑑」「大陸画刊」などを発行し、東京の朝日新聞と姉妹紙の関係にあったそうだった。

父は編集整理部記者として昭和十四（一九三九）年三月、単身で上海に渡った。父、四十二歳の時であった。

翌昭和十五年五月、母は三人の子供を連れて住み慣れた東京を離れることになった。母三十七歳、兄十四歳、私十歳、妹六歳の時であった。神戸港より大洋丸に乗船。この大洋丸は第一次大戦の時、日本がドイツから賠償船として接收した巨船であった。広い甲板を、妹と歓声をあげて走り回ったことを思い出す。静かな航海であった。

上海埠頭には、父と伯父が笑顔で出迎えてくれた。船から荷をおろす中国人の苦力たちの「ヘイホー、ヘ

イホー」の掛け声は、初めて耳にする外国語であった。目の前に立ちほだかる大きな建物や東京では目にするものなかつた風景に、子供ながらに目を見張ったものである。伯父の住む「ブロードウエーモンション」に案内され食事を共にし、中華料理のフルコースを初めて口にした。洋式のお風呂で体がぶかぶか浮いてしまい、妹と大騒ぎをしたことを思い出す。眼下に見える車、歩く人々が蟻のように見え、その高さに驚いたものだ。

私たちの住まいは閘北^{ザホフ}宝昌路の新聞社の社宅であった。周辺には市街戦跡の商務院書館のがれきの山が残っていた。新天地を求めて働く父は水を得た魚の如く、生き生きと働いていた。母も上海の地が性格に合っていたと見え、精力的に異文化を享受していたようだった。

昭和十九年三月、父に召集令状が届いた。父四十七歳の時であった。子供に一度も手を上げたことのない、優しい父との別れは悲しかった。父はかつて陸軍少尉の軍籍にあつたとかで、少尉の肩書で軍刀一本

引っ下げて、上海郊外の大場鎮空港から漢口に向かった。奇しくも三月十日の陸軍記念日であった。いよいよ上海も不穏となり、帰国する人も多くなってきた。父のいない生活に母は不安になり、伯父の勧めもあって、疎遠になっていたが母の兄を頼り大連に行くことを決意した。五年間の思い出と共に昭和二十年四月、上海を離れた。母は四十二歳、兄は東亜同文書院在学中、私は上海第一高等女学校三年生、妹は上海第九国民学校五年生の時であった。

二 大連へ

乗船した船の名前は憶えていないが、航行中、機雷で沈没した帰国船のラストが波間に見えた……。私たちも同じ運命になるかもしれないと不安が募り、救命胴衣を付けたまま甲板にうずくまっていた。ある宗教団体が闇の中でどんつくどんつく打ち鳴らす閉扇太鼓の音が、一層不気味さを増していた。船は相当揺れたが無事大連港に着いた。

大連の埠頭に、伯父夫婦と使用人Mさんが出迎えて

くれた。初めて会う伯父は、職人氣質の物静かな印象を受け、ほっとした。馬車に揺られて行くアカシアの並木道は、絵葉書のような美しさだった。これから始まる新しい生活に期待と不安が交錯していた。伯父の家は愛宕町十番に「赤津紳士服店」の看板を出していた。四階建てのマンションの一階を仕事場に、二階を住居にしていた。伯父は大正時代に大連に渡り、紳士服店を開業。かつて東京三越で裁断部長の経歴を持ち、腕はなかなかのものだったらしい。ミンシ五十台を置き、大勢の職人を抱え盛大に店を張っていた。

私は大連弥生高女三年生に転入。妹は大広場小学校五年生に転入。兄は伯父の店の手伝いをするようになった。学校生活はほとんど勤労奉仕の毎日であった。敷島広場で貯水池掘りや、星ヶ浦で敵の上陸に備えての壕掘りに汗を流した。よく鼻血を出しては草むらに寝かされ、夏の空を仰いでいたことを思い出す。そして四カ月後の八月十五日、終戦を迎えることになったのである。終戦と同時に学校は休校となった。

新聞社からの送金も途絶え、母はうろたえた。いくば

くかの貯金が頼りの綱であったが、後に、売り食いの生活が始まることになった。

三 レイブ

終戦後まもなく街にソ連兵が進駐してきた。昼となく夜となく、大きな体の赤ら顔のソ連兵が自動小銃を手にし、「マダム、ダワイ。マダム、ダワイ」と戸を蹴破り押し入ってくる。「マダム、ダワイ」とは「女をくれ」という意味である。ある日中のことであった。母が階下で食事の支度をしているところへソ連兵が突然入って来て、「ウオツカ、ダワイ。ウオツカ、ダワイ」と大声が聞こえた。当時の我が家には酒などあるはずもなく、母はとっさに酢の瓶を渡して外に飛び出したようだ。二階には兄と私がいたのだが、ソ連兵が長靴のままガツガツと二階に上がって来るではないか。万事休すである。頭の中が真っ白になった。二階の窓から下の道路に飛び降りようか、それとも押し入れの中に隠れようかと思ふ間もなく戸が開いた。そのまま戸と共に、私の体は戸の裏側に張りついた。戸

をありったけの力で自分の体に引き寄せた。開かれた戸の前二メートルぐらいのところに姿見があり、その鏡に仁王立ちのソ連兵の姿が私には見えるのであった。「見つかったらどうしよう」と、更に戸を引き寄せた。戸を持つ手がわなわなと震えて、戸がカタカタと揺れた。生きた心地がしない。ソ連兵はすぐに柱に掛かっている母の着物に目をやり、「マダム、ダワイ」を繰り返しながら兄に銃を向けた。兄は時計、トラップなどありったけのものを差し出し、ソ連兵の気を静めようとした。この時間はわずか二分か三分のことだったと思うが、私にはとてつもなく長い時間を感じたのである。伯父の家の使用人が五、六個の時計を持ってきてくれた。下から、「ロスキー、チャスイ、チャスイ(時計)」と呼びかけられ、それにつられて階段を下りて行ってくれた。腕に時計を全部はめて得々として帰って行ったという。ソ連兵が、もし姿見の中に私の姿を見つけていたらと思ったとたん、体から血の気が引き、へたへたと座り込んでしまった。無事で良かったと母と抱き合っ泣いた。そして自分一

人で逃げ出したことを母は私に詫びていた。

来る日も来る日も、ソ連兵におびえた。特に夜は恐ろしい。親子四人、夜になると階段に並び、身をひそめて外の様子をうかがう。そのうち、ザクザクと靴音と共にガラス戸がバリッバリッと、自動小銃の先で破られる。そこで、それ一つとばかりに脱兎の如く裏口から逃げ出す。裏の塀をよじ登ると、伯父の住むマンションの窓がある。そこへ逃げ込むのである。

どこかの家にソ連兵が侵入したことが分かると、一斗缶の底をたたいて近隣に知らせることになっていった。婦女子は、マンションの最上階の家に避難することになっていて、男の人たちは、家々にある時計、貴金属を手にして、ソ連兵を外におびき出す役目をしていった。

ある日、忌まわしい事件が起きた。ガンガンと缶の音が鳴り響いたので、母と妹と三人で家を飛び出たが、マンションの階段を駆け上がる途中、階下の一軒家でソ連兵の姿を目にした。大きな物音と共に、逃げ惑う婦人の姿が窓に映った。しばらくして静かになっ

たが、そのときには、私には何が起こったのか分からなかった。後で大人の人たちから聞かされたことは、その婦人はお産をして間がなく、家中を逃げ回り必死に抵抗し、最後にはお産をしたあかしの丁字帯までも見せたが、容赦なく悪魔の手にかかってしまったのだ。強姦という現実には、当時十六歳の私は大きなショックを受けた。

その後間もなくその婦人は亡くなり、白い布で包まれた遺骨を抱いて帰国するご主人の姿は痛々しかった。今もって目に焼き付き、忘れることはない。

昭和二十一年初めのころから、少しずつ治安も落ち着きを戻してきたので、私は街に出て立ち売りをすることにした。当時、立ち売りのことを、なぜか「ハラショ」と言っていた。「ハラショ」とはロシア語で「良い」という意味である。

当時の日記が、わずかな枚数であるが手元に残っていたので原文のまま載せることにする。

昭和二十一年八月十四日

水曜日

雨

早くも明日をもって終戦一年となる。今や敗戦国民の苦痛が、ひしひしと身に迫ってくるのである。親子数人、生きる力を失い、哀れ悲惨な最期を遂げる悲劇、また親を失い、唯一人、天下の孤児となりし可愛い少女、また青年路頭にさまよい物を乞う姿を、たまたま見受ける。まさに敗戦国民の姿である。我々上海からの疎開者も、路頭にさまよい歩く、一步手前である。しかし戦に敗れようとは夢にも思わず、ただ勝利の日を目指し、むしろ喜んで大連に来たのである。今考えると、死にに來たようだ。しかしこんなことを今更言うのはグチだ。私たちは父に会うまでは絶対死ぬことは出来ない。一生懸命働き生きるのみ。

八月十五日 木曜日 曇

今日は敗戦一年期である。去年の今日のあの時、日本人の心境はどんなであつたらう。あの重大放送に耳をかたむけた時、私たちの心は緊張がみなぎっていた。いよいよ一億国民一丸となり、最後まで戦い抜くという放送と予期していたが、尊い玉音を拝し、ただ

ただ感涙するのみであつた。今まで何のために働いてきたのか。ペンを緘に持ちかえ、あの炎天下汗と土にまみれ、壕掘りに、貯水池掘り、また戦車壕掘りに、一生懸命働いた。しかしそれも皆水の泡となつてしまったのだ。

日本はどうして負けたのか。正義ではなかったのか。実力が足りなかったのか。いやいや決して不正義でもなければ実力が足りないのでもなかっただろう。特に学徒等は涙ぐましい程、よくやったと思う。しかし今考えると、日本人はあまりにも利己主義であつた。今日でも、奥地から来た人は、水一杯を乞うのでさへ中国人の所へ行く。食べ物でも中国人の方が恵む。これだけでは少ないのではないだろうか、日本人は変なことに気を使う。結局知っていても見ぬ振りをして通るといふ具合になる。実際、負ける戦争なら初めからしない方がよい。老いたる父までも前線に出され、今はいづくにおはすともわからぬ。田舎にでも帰っていればよいが、それもわからぬ。私たちの今の唯一の光明は、父と会えることだ。父無くしてなんで

前途に灯あろう。どうぞ父が生きておりますように、神在すなれば、父と再会出来ますことをお祈りいたします。ああ早く内地に帰りたい。いつ帰れるのかしら――。

ハラシヨに行き、二、三枚伯母の家の品物売る。「毎日ああしてハラシヨに行っていたっけ」と、楽しい過去になりますように。

八月十六日

金曜日 晴

朝起きるのがとても辛かった。母が一時間も前から朝飯の支度をしている。午前中は何もせず家にいる。本を返しにすみちゃんと行く。お昼ごろ、柴田さんのおばさん来訪。来る度に鷺見さんの話。二時ごろよりハラシヨに出掛ける。人を馬鹿にするのでしゃくにさわる。たたいてやりたい程だ。二点売って帰る。いくら働いても毎日の支出の半分である。朝はピンズ、昼は甘ころ。晩だけは米と粟の半々。現在米が一斤九十五円、粟が三十円、それから割り出しても一日どのくらいかということが判る。それに、この一週間雨ばかりで野菜がものすごく高い。ジャガイモ百匁二十五円、おなす十五円、お味噌汁でも馬鹿に出来ない。骨身惜しまず働いても一日の生活に足りない。しかし兄が月に千五百円稼ぐので、まあそれは粟代である。それに補充するのは私たちだ。洋子は今のところ何もしていないが、近々南京豆でも売らせよう。余裕はない。柴田さんのおばさんの話では、鷺見さんの家は、五人で一本のきゅうりを二回で食べるそうだ。それを考えると家はまだまだよい。感謝すべきだ。さあ早く寝て、明日うんと働こう。空は一面真っ黒、星一つ出ていない。明日は雨かな。

八月十七日

土曜日 晴

昨日の意気込みはどこへやら。朝起きてみると、母の革靴が無い。昨日すみちゃんと本を返しに行く時、履いて行ったのであるが、帰って来て、いつも二階に上げるのを、その時に限って脱ぎっぱなしだった。いつ盗難にあったか全然記憶に無い。多分早いところ盗まれたらしい。実際泣いても泣ききれぬ。一つしかない

靴、冬暖かい靴、履き心地の良い靴。こうして連想してみると、悔いても悔い足りぬ。自分の不注意だ。何も革靴など履かなくてもよいのだ。働く物は身軽ななりでよい。そして、うんと働くのだ。靴を盗まれたのも、もっともっと真剣になって働けという戒めかもしれないぬ。この時代、しゃれてみたところでどうなるものか。我が家は他の家と境遇が違ふ。みんなで必死に働かなければ、食べていくことが出来ないのだ。今日一日くさくさしてハラシヨにも出なかつた。しかし無くなつた物を、くよくよしていてもきりが無い。それを取り戻すつもりでうんと働かなければならない。母も一日寝ていた。午後四時ごろよりハラシヨに行った。二点売って帰る。どうにかして戸締まりの良い方法を考えなければならぬ。安心して外に出掛けるわけにいかなくなる。後藤さんの家も、お米が無くピンズを食べているらしい。後藤さんの品物も、早く売らなければならぬ。明日早く起きてやろう。そよとの風もない、コオロギがかすかに鳴く。故郷をしのびつつ床に就く。

八月二十日 火曜日 晴後曇

午前中、何も売れずに帰る。少し風邪を引き気分が悪い。二時間ばかり昼寝をする。雨がパラパラと降り涼しくなる。午後四時ごろより出掛ける。二点売る。今日の商売はこれでやめた。一日の利益、百二十円。米一斤百円、粟五十円。だんだん生活が困難になっていく。早く内地に帰りたい。ただそのみ望みつつ生きていく。青い美しい清水、青々と繁る草木、かすみにつつまれ、うっすらと浮く山々、ああ思ひ出すと、矢も盾もたまらない。

いくら内地が食糧に困るとも、外地での精神的苦痛がないだけでも良い。近ごろ日本人に対する行動は言語を絶するものがあり、物を売っているそばに来てさんざんひやかしたあげく、乳の辺りを触ってみたりする。全く考えると嫌になる。それでも日本人は耐え難きを耐え、忍び難きを忍んでいるのである。もう少しの辛抱、辛抱。明日はすみちゃんのお兄さんと早く買物に出掛けることを約束した。夜九時ごろまですみちゃんの家の前で、多美ちゃんと二人、K兵（注ソ

連の憲兵のこと）たちと話す。皆と話をしているのが一番楽しい。九月の声ももうすぐ、内地帰還も間近いだろう。

八月二十四日 土曜日 晴

昨日、一日中風邪のため寝ていた。今日大分良い。ハラシヨに行こうかと思つたが、またぶり返すといけないのでやめた。明日行こう。昨日『女性の真実』を読み上げ、今日パール・バックの『大地』一部読み上げ、二部を借りて来る。中国の風俗習慣というものがよく味わかる。「土に生き、土に還る」人生観がよく表れている。夕方大広場に散歩、佳世子ちゃんの家で二時間程しゃべる。自分一人で話をしていたようだ。たまにはよいだろう。こんな時、百瀬さんでもいたら色々と話すんだけれどなあ。近所に話せる人がいない。少々咳が出るので早く寝ようと一度床に就いたが、日記を書くのを忘れたので、また起き出して記す。日記を書くのはあまり興味を持たないが、何か義務的に記すような――。

九月十日 火曜日 晴

今日は中秋節である。二年前の今日は、南京の伯父が大きな月餅を持って来て、皆で頂いた。早いもので、もう二年も経った。ここでは小さい月餅が一つ五十円もする。到底口には入らない。それどころかお月見も出来ない。中国人は、きれいな服を着て歩いている。日本人も和服を着て、見せてやるといいんだけれど……。しかし中国人も、今日も商売をしている。今日は早く出掛け百九十円得た。

四 ハラシヨ

この当時は、ほとんど毎日街に出て立ち売りをしてきた。母の着物を売りに、十六歳のオカッパ頭の少女が、両肩に二枚、両手に二枚を掛け広場に立つ。大連の冬は厳しい。零下何度という寒さである。革靴の底が地面に凍りついてしまうので足踏みをしながら、ひたすら買い手を待つのである。出掛ける時、必ず母は私に言う。「歯を見せてはだめよ！ にこにこ笑ってはだめよ！」を繰り返す。危険を伴う仕事に、母親は

祈りにも似た気持ちで私を見送ったに違いない。私は、馬鹿にされてたまるか、鉄仮面のような形相で街に立った。私は背も低く年齢より幼く見えたのか、同情もあって割と買手が付いた。母の着物はすぐに底をついたので、伯母や近所の人の着物を預かった。今という委託販売ということであろう。言い値ではなかなか買ってくれない。必ず三分の一くらいに値切られてしまう。こちらもだんだんと駆け引きが上手になり、大人相手に丁々発止と懸命に売る。売らなければ一日の食べ物にありつけないのである。当時、私は働くことにある種の満足感があり、あまり辛いとも悲しいとも感じたことはなかった。むしろ生計の担い手になれたことに、喜びさえ感じたものだった。

五 サクラ

私の売りっぷりが良いと見えたのか、中国人ふたりがそばに来て、自分の品物を売ってくれないかと頼んだ。私はすぐにその話にとびついた。その品物はあざぎ色の綿の中国服地であった。一着分ずつ切った服地

を手にいっぱい持たされる。その中国人が私の前に来ては、「この品物は安いよ」とか「良い物だよ！」と大声を出しながら買って行く。見る間に人が群がり、あつという間に全部売れてしまう。売れるとすぐ、どこにいたのか例の中国人が現れ、また品物を私に渡す。一日中それを繰り返すのだ。その時初めて「サクラ」という言葉を知ったのだ。この仕事は我が家にとっては良い収入源になっていた。

その年、昭和二十一年の暮れ、中国人も正月三日間は仕事を休むので、品物を私の家に預かってほしいと頼まれ、伯父の家に案内した。店のショーウィンドーに大きな包み一袋を預かったのである。翌朝、その袋がこつ然と消えていた。戸口の前には大きな汚物がある。中国人が泥棒に入る時の習慣だと聞かされた。泥棒は例の中国人に違いないと言うが、証拠はない。三日後に仕事に出ようと中国人がやって来た。盗まれたことを説明したが、聞き入れてくれない。賠償しないと今すぐ私を警察につき出すと大声でわめきちらした。母は泣きながら、「和子を助けて欲しい」と伯父

にすぎる。賠償金は二万円と言う。驚くほどの大金であった。三日間の猶予をもらい、伯父は貴金属、シュールバ（裏にも皮の付いたオーバー）などを売り、支払ってくれたのである。子供だてらに生意気なことをするからだだと、大変な剣幕で叱られた。私は土下座して謝った。でも私だって生活のためにやったことなのにと、悔しくて涙が止まらなかった。帰国してからその返済に父が大変苦労したことを、後に母から聞かされた。

六 危機一髪

街で知り合った友人と、並んで着物を売っていた時のことである。中国人が私の持っていた着物を買いたいが、今お金を使い果たしたので、自分の家まで一緒に来てくれないかと、私の手から着物を取り上げずたすたと歩き出した。友人と私はその中国人の後ろについて行く。街が次第に遠くなり、白壁の民家が目立つようになつてきた。二人は少々不安になりながらも懸命に後に付いて歩いた。やがて、ここだと手で招き家の

中に入って行く。黒い扉の中を見た瞬間、私は友人に向かつて叫んだ。「逃げよう！」友人の手を引いて走った。友人は何がなんだかさっぱりわからなかったと後で言っていたが、私が目にしたものは、四、五人の男がベッドで横になりながら、長いキセルのような物を口にしていた。私は直感的にアヘンだと思った。巷では人さらいの噂が立っていた頃だったので、私の判断は間違いではなかったようだ。

七 我が家

我が家と言っても、伯父から提供された家だった。元、伯父の所で働いていた中国人たちが寝泊まりしていた古い建物で、階下はシンが置かれていたが、それらは全部売り払われ、今は夢の後の無残さで土間になっていった。そこに粗末なお勝手とトイレがあった。その二階に私たち親子四人、六畳一間に身を寄せ合つて寝ていたのである。天井は低く、屋根裏部屋のような部屋の片隅に天窓があった。舞台装置としては満点で、時には電灯よりも、降り注ぐ月の光の方が明る

かった。まるで『小公女』の主人公になったようなロマンチックな気分浸ったものである。夜の我が家には安らぎがあった。毎晩のように母は歌を唄ってくれた。母の声は美しく、四十三歳とは思えない声量であった。「庭の千草」「早春賦」「荒城の月」などよくみんな唄ったものだ。不思議なことに母は最後に必ずフランス国歌を原語で唄うのだ。なぜだろうと思っていたが、八十八歳の時に脑梗塞で倒れ、言語が不自由になりながらもこの歌をよく口ずさんでいた。

今思えば、母にとっては自分自身を奮い立たせる最大の応援歌であったのではなからうか。

なぜか伯父の家には沢山の本が並んでいた。その中の日本文学全集(橙色の表紙)を借りて来ては、兄と夢中で読んだものだ。短い夕飯の後の長い時間を持って余すことなく過ごせたことは、幸いだった。特に田山花袋の「蒲団」にいたっては、十六歳の体を熱くした。現実から逃避できる唯一の時間であったように思う。

八 労働組合

いつの頃からか、伯父の家に時折組合員と名乗る人が現れるようになった。有産階級と見られてか、残り少なくなった貴重な石炭をリヤカーに積み込み、兄が後を押して、どこへ届けるのか家を出ていく。そのうちに娘に着物を、と言い出した。最後まで、私と妹の晴れ着だけは日本に持ち帰るのだと、母が行季の底に大切に保管していた着物までも、とうとう差し出すことになったのであった。当時私には、着物を失うことになんの未練もなかったが、ただ同じ日本人が「なぜ」と理解に苦しんだ。これが本で読んだところの擲取かと、子供心にもいまましく思ったものである。やがて帰国となり佐世保に上陸したとき、密告者により、その人は組合員かどうかは判らないが、銃殺されたと聞く。

九 聖徳街

昭和二十一年の秋頃だったろうか、三カ月間をSさん一家と暮らすことになった。Sさんの住居は聖徳街

五丁目にあった。知人の世話で満鉄の社宅を借りることが出来たそうだ。Sさん一家とは新聞社の社宅で隣同士で、家族ぐるみの付き合いをしていた。私達の後を追って、ご主人を一人残し大連に来てしまったのである。十歳の長男を頭に、八歳、五歳、三歳の幼子を抱えての生活は大変なものであった。「助け合って生きていきましょう」と母が提案し、伯父の所を一時引き上げて共同生活に入った。S夫人と母は、わずかに残っていた毛糸で靴下を、夜遅くまで黙々と何足も編んだ。真つ赤な靴下は色が好まれたのか、街に出すとすぐに売れてしまった。兄も煙草を売りに大連運動場に出た。それを見て十歳の妹も煙草売りを始めたが、首から箱をさげて聖徳街の電車の停留所に立ち、寒風にさらされながら凍える手で釣り銭を渡す様子は見るにしのびなく、すぐやめさせることにした。生活は苦しくなるばかりであった。兄と母、S夫人の三人で即席の屋台のようなものを作り、一膳飯屋を始めた。当然ながら私は、子供達の世話、家事一切を引き受けることになった。九人の口を満足させることは並大抵な

ことではなかった。幼子は日に日に体力が衰え、笑うことさえなくなってきた。頭にはシラムィがわくようになってきた。全く悲惨な日々であった。押し入れの戸や柵までも叩き壊し、ストーブの燃料にした。最後には六〇〇ワット電熱器一つで九人が暖を取るようになった。その頃、S夫人は夜の仕事を見つけたのか、パンや菓子を抱えて帰って来るようになった。三歳のK子ちゃんも、夜になると母親が恋しく泣くばかりであった。私は五歳と三歳の子を両脇に抱き寝ていた。時々母親と間違えてか、小さな手が私の胸をまさぐったが、私は不思議なくらいなんの恥じらいもためらいもなかった。今は、その幼子も立派に二児の母親となっており、その時の話を聞かせたが、全く憶えていないと屈託なく笑っていた。

長男のE君は、母親の行動に不信感を抱くようになり、母親と全く口をきかなくなっていた。生きていくための手段として仕方ないと私達には理解できるが、十一歳の少年には無理なようだった。そんな殺伐とした生活が続く中、Sさん一家に帰国の朗報が届いた。

天の助けである。私達は生きて帰れると、S夫人と母は手を取り合って泣いていた。我が家の帰国も間近いものと信じ、また伯父の所へ戻ったのが昭和二十一年の十二月初めの頃だった。

十 貧すれば、鈍する

温厚な伯父の性格が日に日にとげとげしくなっていくた。私達を引き受けた後悔がお酒の量を増し、毎晩のように母を捕まえては、くどくどとグチを言うのであった。返す言葉もなく、頭を下げて母は聞くだけであった。私達はあまり伯父に負担をかけず懸命に働いてきたつもりでいたが、肉親であるが故の愛憎が、伯父の口から噴き出た。

母は大連を選択したことは間違이었다と言う。子供に苦勞をかけたのは自分の責任だとも言った。「お母さん、こうして私達は生きているんだから、それで十分よ！」誰が悪いわけでもない。ただ戦争が憎いだけである。

十一 帰国命令

明日中に集結するようにと帰国命令を受けた。突然のことなので、家中大わらわとなった。嬉しい、やっとな帰れる日が来たのだ。早速、家族全員のリュックサックを作らなければならない。帯の芯地を抜き取り、一日中ミシンを踏んだ。型などどうでもよい。二本の手が通ればよいのである。堅い芯地に手こずったが、なんとか間に合わせることが出来た。全く生気を失った伯父達は、内地で生活の足しにでもするのか、蒲団の中に色々な物を詰め込んでいる。その度に羽毛がふわふわと舞い上がる。蒲団のそばに、赤い缶の「味の素」が山のように積まれてあったのが印象的だった。

久しぶりに赤々と燃えるストーブの火に、心が和む思いであった。写真、書類、日記等、一切持ち帰れないと聞いて心が痛んだが、仕方がない。全部ストーブの灰にしてしまった。そしてついでに、二年間の悪夢も一緒に……。

荷物は三十キログラムまでとのことだった。私達の

荷物は各自リュックサック一つで事足りたのだが、伯父の荷物は相当の量になった。山県通りの収容所までほどのくらの距離だったろうか、荷物を引きずったり転がしながら歩いて行つた。二月の風は冷たく、身が切られるような寒さだったが、帰れる喜びの方が勝り、荷物を引く手にも力が入つたものだ。後で聞いた話だが、伯父は全財産を拠出することを条件に、ソ連側に嘆願書を出していたそうだ。そんな訳もあつてか、収容所では私達は所属する所がなく、名無しの権兵衛だった。そんな時、「自分の班に入りなさい」と、一人の男性が白い布に班と名前を書いて私達の胸に付けてくれた親切は忘れることができない。収容所で男の人達は石炭運び等の労働をさせられ、二日後にトラックで大連埠頭に向かつた。私は労働のことは憶えていないが、兄からそう聞いた。

いよいよ二月十一日、乗船の日である。私達は荷物検査、身体検査は免れたが、聞くところによると、身体検査にいたつては、服を脱がされ、貴金属を隠し持っていないか体の隅々まで検査をされ、屈辱的な思

いをした人もいたそうだ。

乗船した船の名前は憶えていないが、貨物船であつたことは確かである。むせかえるような人いきれで、食べ物も殆ど喉を通らなかつた。一週間の船底生活は記憶が薄れてしまつたが、ただ、内地の青い陸地を見た時の感激は、今思い出しても体が震えてくる。佐世保、南風崎に上陸。頭からDDTを思い切りかけられ、真白い粉だらけのまま日本の土を踏みしめたのが、二月十八日のことであつた。軍の兵舎跡に収容された時の二月の日差しは、暖かく感じた。床に一枚の毛布を敷き腰を下ろした時に、初めて二年間の緊張感が緩み、言い知れない幸福感を味わうことが出来たのである。

幸い父も無事に帰国して、品川駅で親子五人、三年振りに劇的な再会を果たしたのである。

生きて還る故山に雪の輝やけり。